２０１６年

伊是名村勢要覧

いぜな

沖縄県・伊是名村

発刊にあたって

「歴史と自然、人が共生する ときわのしま・伊是名」

昭和十四年七月に、旧伊平屋村から現伊平屋村と本村が分村し、「伊是名村」が誕生しました。以来、本村は先人達の弛まぬご努力により、生活基盤の整備等が推進され、着々と発展して参りました。

本村の基幹産業は、農業・漁業であり、さとうきびや稲作、モズク養殖等の生産が盛んであることから、これらの基盤整備をはじめ、生活環境の整備、社会福祉の充実、教育文化の向上等に積極的に取り組み、一定の成果を収めてきました。近年は、観光産業にも期待を寄せ、県外からの修学旅行生を対象とした「民泊体験交流事業」が軌道に乗り、観光産業も主要産業に成長しつつあります。

また、本村は、琉球王朝第二尚氏の始祖「尚円王」生誕（1415）の地として広く知られ、平成二十七年（2015）に、尚円王生誕六百年の節目を迎えました。

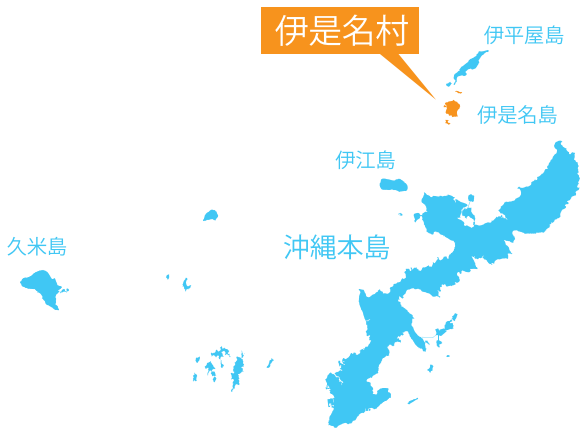
今後も、偉大なる王様を誇り、その遺徳を次世代に継承すべく、本村の歴史や文化を内外に発信していくと同時に、引き続き恵まれた自然環境や歴史・文化等を活用して、冒頭のキャッチフレーズを基本目標に、活力ある村づくりに邁進して参ります。

この村勢要覧は、本村の概要や様子を写真及び資料で紹介しており、より多くの方々に本村の現状をご理解頂ければ幸いです。

伊是名村長　前田 政義

村木：ウバメガシ

村花：サンクバーナ



歴史漫歩

History of Izena Island

いぜな歴史紀行

～銀の穂が揺れるときわの島～

琉球王国の歴史を語るにおいて、最も重要な人物の一人である「尚円王」。約４００年という、世界でも稀に見る長き統一王朝を築いた偉大な人物です。彼は、伊是名島の百姓の子として生まれた、普通の青年でした。後に国王にまで上り詰めたこの青年が生まれ育った島は、どのような歴史を歩んできたのでしょうか。悠久の時を刻む美ら島と語り継がれる偉人尚円王の物語を見に、歴史散歩へ出かけましょう。

松金を本島へと導いたであろう朝日は、今日も伊是名島を照らしている

フェリーで島に近づくと見えてくる
伝説の山々

伊是名諸島は、太古より黒潮の恩恵にあやかり、島を縁どるラグーンが海の幸の宝庫となって人々に恵みをもたらしてきました。村内で確認された貝塚や遺跡も、先史時代の人々が海辺近くの砂地に住み、魚や貝をとるなど海と深い関わりを持ちながら暮らしてきたことを物語っています。また、ウフジカ遺跡からは沖縄本島と奄美系の土器が出土し、この島が古くから2つのクニを結ぶ拠点であったことが分かります。

貝塚時代、人々は海や山の恵みを求め移動を続けていましたが、十二世紀頃になると、肥沃な土地を活かし、米や麦を作る農耕社会を営むようになりました。また、海を越えた交易も活発になりました。十三世紀に入ると、集落の権力者たちは、砦としてグスクを築き始めます。グスク時代と呼ばれるこの時期に、伊是名城も築かれました。南方海岸に突き出た岩山はまさに天然の砦であり、難攻不落の城と謳われました。

それから約２００年の時を経て、この伊是名島生まれの百姓の子が琉球王国の王へと上り詰めることに。それが、後に約４００年続く琉球王国第二尚氏王朝の始まりでした。この出来事は、伊是名島の歴史を大きく変えていくことになります。尚円王生誕の島である伊是名は、この後神聖な地として別格の扱いを受けることになったからです。尚円王の叔父一家は「銘苅大屋子」の地位を与えられ、叔母は「二かや田の阿母」と称す神女職を賜り、姉はその上職である「阿母加那志」の職を与えられました。これら王家縁の一族はユトゥヌチと呼ばれ、たびたび首里に上っては国王に謁見することが許されました。その際王家から贈られた様々な品は、現在も貴重な文化財として大切に保管されています。

古琉球時代、伊是名と伊平屋は一つの行政区「ゑへや（伊平屋島）」として扱われていました。ところが、１６０９年、徳川家康の出兵許可を得た薩摩藩島津家久が首里城を陥落。この島津侵攻により、琉球史は古琉球から近代琉球へと移り変わり、「ゑへや」は「伊平屋島」と呼ばれるようになりました。そして、現在の伊是名を前地、伊平屋を後地と呼び、番所は伊是名へ設置されたのです。

１８７９年、廃藩置県により琉球藩が沖縄県へ。こうして約４１０年にわたって続いた「琉球王国」は終わりを告げました。伊是名もまた、１８８０年に番所内に役所が設置されましたが、翌年那覇役所に併合されました。その後、１８９６年の郡編成により島尻郡に編入。番所も役場と改称されましたが、村役場が伊是名にあると不便だという声が伊平屋から上がり、昭和14年（１９３９年）に伊平屋島は2つの村に分かれ、伊是名村が誕生したのです。

太平洋戦争が勃発すると、伊是名村でも戦時体制を整え始めます。昭和19年（１９４４年）には、男子が伊江島飛行場建設の工事に徴用され、十・十空襲では民家の一部が爆撃を受けました。昭和20年（１９４５年）に終戦、沖縄県はアメリカの統治下へと置かれます。戦時下の暗い自縛から解かれた昭和20年後半にはベビーブームが訪れ、伊是名村でも人口が爆発的に増えていきました。多くの人々を抱えた村では、食糧調達のため野山を切り開き、田や畑を広げていきました。昭和30年（１９５５年）をピークに人口は減少の一途をたどります。そして、昭和47年（１９７２年）の本土復帰後は減反政策により、黄金色の稲穂がたなびく田園風景は、現在の銀色の穂が風に揺れる鮮やかなさとうきび畑へと移り変わっていったのです。

伊是名集落のフクギ並木からこぼれる
木漏れ日の中を歩けば、まるで
タイムスリップしたような感覚を覚える

夕日に照らされ銀の穂が輝く
さとうきび畑

伊是名城跡の麓に移転された玉御殿。
島の観光名所の1つ

琉球王国の歴史を動かした偉人

～尚円王の歩んだ道～

若き日の金丸像（尚円王：高良倉吉監修・名嘉睦稔作）

遡ること約600年。琉球が南山、中山、北山に分かれ、各地の豪族たちによる群雄割拠が続いていた頃、首里から遠く離れた小さな島で、一人の男児が産声を上げました。北の松金（にしぬまちがに）と名付けられたこの少年こそ、後に琉球王国第二尚氏王朝の始祖となる尚円王だったのです。明朗快活に育ち、勤勉で美男子として評判だった青年は、島中の娘達の憧れだったと言います。ところがある年、日照りが続き島中の水田が干上がる被害に見舞われました。しかしそんな中、松金の水田だけは、水が豊富に溢れていたのです。「松金に好意を寄せる娘たちが、夜な夜な水を運んだのだ」「上方にある松金の田に、下方の水が逆流したのだ」など様々な説が囁（ささや）かれましたが、村民たちは、最終的に松金が水を盗んだに違いないと、松金の殺害計画を立てました。その企みが実行される日、何も知らない松金が野良仕事を終えて帰ろうとしていると、突然白髪の老人が現れ、身の危険を告げたと言います。急ぎ山中に隠れた松金は、妻と弟を連れてその夜のうちに伊是名脱出を図りました。真っ黒な暗闇の中、手探りで進む三人の前に、どこからともなく一筋の光が差し、浜辺へと導きました。この海岸から松金は舟を出し、対岸の本島・国頭を目指しました。島では、今でもこの海岸を「明し原（あはしち）」と呼び、浜をウシュフンチャ（御主加那志が踏んだ土地）と呼んでいます。

島を出た松金は、流れ流れて首里へと辿り着きます。そこで、後の琉球王国第二尚氏王朝第6代の王となる、尚泰久に認められるのです。尚泰久の元で過ごす中で、松金は「金丸」と呼ばれるようになり、長けた知と誠実な人格から、瞬く間に地位を上げていきました。泰久が王位に就くと、さらにその手腕を発揮し、45歳の時には王の側近として王国の財政と外交を担当する御物城御鎖側の要職に就きました。泰久は金丸を大変信頼しており、政事の大切な決断の際には、常に金丸へ助言を求めたと言います。しかし、尚泰久王亡き後、第7代の王尚徳は稀に見る暴君で意見が合わず、金丸は職を辞することにしました。隠居して静かな生活を送っていたある日、尚徳王が亡くなりました。まだ幼い王子に王位を継承するか臣下たちが迷う中、老臣・安里大親が「虎ぬ子や虎、悪王（尚徳）の子や悪王、物くいしどう我御主、内間御鎖どう我御主」と唱え、前王を献身的に支え徳のあった金丸に白羽の矢が立ちました。そして、金丸が56歳の時「尚円王」と名乗り、琉球王国第二尚氏王朝が誕生したのです。尚円王が王位に就いた時、故郷の伊是名島を出てから32年の月日が流れていました。

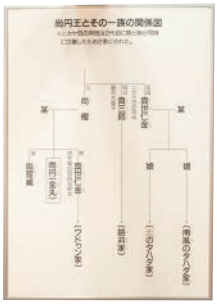
こうして、伊是名島の百姓の子に生まれた一人の青年は、波乱万丈の人生を歩みながらも琉球王国の天下人となり、その生涯を終えました。そして、1879年の琉球処分まで19代、約410年にわたる長き統一王朝を築きあげた人物として、今なおこのサクセスストーリーは伝説となって語り継がれているのです。

1左：尚円王のへその緒が埋められているという「みほそ所」　右：松金（尚円王）の水田であったと伝わる逆田（さーた）。水が逆さに流れたという説から名付けられた

尚円王の叔父一家である「銘苅家住宅」。昭和52年に国指定重要文化財となった

尚円王の生家跡に残る神アサギ

尚円王御後絵（佐藤文彦作）



「伊是名村ふれあい民俗館」で保管されている、尚円王とその一族の関係図

平成7年に生誕580年を記念して整備された「尚円王御庭公園」。銅像もこの敷地内に建つ

悠久の歴史が刻む音 先人たちの鼓動が聴こえる

▲黒漆箔巴紋茶箱・茶筒

▲宣徳香炉

▲朱漆箔巴紋酒器

▲朱漆箔巴紋食籠

▲黒漆鳥花文点斜格子沈金丸櫃

▲白釉巴紋茶屋

▲黄色地巴紋御玉貫・朱漆箔巴紋御玉貫置盆

銘苅家に伝わる工芸品。首里王府より賜った品々は、玉御殿で行われる公事清明祭で使用されている。

◀銘苅家古文書

首里王府からの辞令書や公事清明祭の詳細、出生届などが詳しく記されている。

伊是名村ふれあい民俗館

数多くの貴重な遺跡が発見されたことから、「遺跡の島」とまで呼ばれるようになった伊是名島。このような先人たちが生きた証を、後世に正しく伝えゆくために造られたのが、平成2年度国土庁のリフレッシュふるさと推進モデル事業の一環として開館した「伊是名村ふれあい民俗館」です。

遺跡の島の象徴とも言えるのが、具志川島で発見された「貝輪装着人骨」。これは、約3000年前の伊是名人であり、沖縄県内でこのような貝輪装着人骨が発見された場所は、現在までどこにもありません。伊是名島で保管されているのはレプリカですが、この人骨から推測するに、当時としては大変高水準の生活を送っていたことが分かっています。それは、伊是名村が遥か昔から、恵まれた大地により豊かな生活が可能だったことを伝えているのです。このほかにも、伊是名村では約2500年～3000年前の土器のカケラをはじめ、その土地の人々の生活を映し出す貝塚なども確認されています。

▲二かや田の籠

また、伊是名村は琉球王国第二尚氏王朝の始祖、尚円王生誕の島であるため、他の市町村では見られない大変貴重な文化財が遺されています。特に、尚円王の叔父一家であった「銘苅家（めかるけ）」より寄贈された品々は、国王や王族から賜った贈り物で、通常特別コーナーにて展示されています。これらは、毎年玉御殿（たまうどうん）で行われる公事清明（クージシーミー）で実際に使用される、まさに生ける文化財です。

このほか、民俗コーナーでは近代沖縄の人々の暮らしを知ることができるサバニや脱穀機などが展示され、小中学生の郷土学習の場として活躍しています。そして館内では、こうした展示に合わせた、伊是名の歴史、生活、文化を伝えるビデオが放映され、より深く伊是名を知る手助けをしてくれます。

このような数々の希少な遺跡や文化財を通して、私たちは先人たちの息づかいを聴くことができるのです。そして今、遠い未来を生きる子孫のために私たちが何を遺すことができるのか、過去、現在、未来に想いを馳せてみてはいかがでしょうか。

▲貝輪装着人骨のレプリカ

▲厨子瓶

▲具志川島出土の沖縄貝塚後期系土器

腕部分▲

貝を装飾品として使用していたことから、文化的精神がすでに定着していたことが分かる。これもまた、伊是名村が恵まれた環境だったことを裏付けている。

▲仲田上遺跡・住居址の断面

1993年5月11日、字仲田の西側集落のはずれ、仲田貝塚に隣接する切り通しの大地で、偶然発見された縄文時代晩期（約2500年前）の竪穴式住居跡。暗褐色の部分に、土器、石器、礫が堆積している。このようにほぼ完全な形で発見されるのは極めて珍しく、周辺を中心にまだ他にも遺跡が眠っている可能性が高い。上記の写真は、遺跡の表面を特殊技法ではぎ取り、民俗館内に展示したもの。

島の名所・旧跡

ふるさとのたから

～伊是名の歴史を見てきた名所・旧跡～

伊是名城跡[県指定]

海ギタラ・陸ギタラ

サムレー道[村指定]

伊是名城跡のイワヒバ
[県指定]

銘苅家住宅[国指定]

逆田[村指定]

[村指定]村指定重要文化財
[県指定]県指定重要文化財
[国指定]国指定重要文化財

尚円王乗馬像

本村には、村の歴史と共に歩んできた重要な文化財が数多く残っています。これらは、それぞれの時代の人々に寄り添いながら、時を刻んできました。こうした文化財のなかには、琉球王国の歴史の「鍵」とも言える伊是名城跡、玉御殿、逆田などもあります。

伊是名城が築かれたのは13～14世紀と言われており、初代城主は伊平屋島出身の佐銘川大主。彼は三山を統一し、琉球王国第一尚氏王朝の国王となった尚巴志王の祖父でした。この城は当時難攻不落の城と称賛され、現在も当時の石垣の一部が残っています。そしてこの城跡の麓にある玉御殿は、首里王府の玉陵が築かれた後に造られ、聖域として現在も島内外から多くの参拝者が訪れています。玉御殿には尚円王の父母、姉、そして親戚である四家が祀られています。この2つの文化財は、尚家22代当主であった故尚裕氏から村に無償譲渡されました。そして現在は、村が大切に保管しています。このほか、逆田や銘苅家住宅など、尚円王縁の史跡が数多く点在し、琉球王国時代の面影を偲ばせています。

また、4集落には神アサギがあり、神秘的な雰囲気で今もなお祭事の聖域として扱われています。そして、歴史と共に豊かな自然を誇る伊是名村には、海ギタラ・陸ギタラといった名所も存在します。岩陰やくぼみに生息するイワヒバや、県内では渡嘉敷島と伊是名島にしか見られないというイゼナガヤなど、珍しい植物も自生しているのです。このように先人を見つめ、現在も伊是名人と共に在る自然や歴史遺産を、後世に残し語り継いでいくことが我々の使命です。

二かや田の拝領品(籠)
[村指定]

イゼナガヤ[村指定]

美織所(ちゅらうぃんじょ)
[村指定]

土帝君(諸見、勢理客)[県指定]

尚円王生誕地
(みほそ所)[県指定]

二見ヶ浦海岸

伊是名玉御殿[県指定]

アハラ御嶽のウバメガシ・
琉球松の群落[県指定]

アサギ(伊是名、仲田、諸見、勢理客)[県指定]

「島おこし奨励賞」を受賞!!

尚円太鼓

小さな島から世界へ 響き渡る新たな伝統の音

島興しの一環で、村の育成団体として始まった尚円太鼓は、尚円王生誕1415年にあやかり平成元年4月15日に活動をスタートしました。

力強い音と軽やかな音が融合する、日本伝統の和太鼓を使い、瞬く間に村を代表する芸能文化となりました。子どもから大人まで、世代を超えた圧倒的なパフォーマンス。空気と地面とを伝って、身体と心に響くその振動は、国境さえも越えて人々に感動を与えました。

民族音楽

「史曲・尚円」

尚円王生誕600年記念 次代に繋ぐ、尚円王の心

平成28年11月3日に21年ぶり3回目の公演が浦添市てだこホールにて開催されました。

尚円王が生まれ王様に即位するまでを琉球古典音楽で使われる、三線、琴、胡弓、太鼓、鳴り物、唄などで奏で、勢理客区のティルクグチ、仕立ていみやらび、尚円太鼓と壮大なオーケストラ形式で熱演しました。「史曲・尚円」は、音楽家の普久原恒勇先生が、伊是名島に導かれるように来村し、村史を中心に歴史家の高良倉吉氏のテキストを元に作曲した大曲です。

総務大臣賞を受賞!!

史劇 尚円王 ～松金がゆく～

尚円王の生きた軌跡が 村民劇で現代によみがえる

平成19年3月の初回から第8回目となる公演が、平成28年3月22日に西原町さわふじ未来ホールで開催されました。

琉球王国の歴史を語る上で、最も重要な人物の一人である「尚円王」。伊是名村では、この偉大な人物への尊敬と憧れ、そして親愛の念を後世まで語り継いでいくために、「村民自らによる史劇」に取り組みました。伊是名島で生まれ育った青年が、農民の子から一国の王になるまでに歩んだ道。それを伊是名村出身の歴史家・高良倉吉氏を監修として迎え、新たな歴史解釈の元書き下ろされた脚本は、県内はもちろん県外でも話題を呼びました。

組踊

「仲村渠真嘉戸」

海を隔てて展開された 恋物語

「仲村渠真嘉戸」を継承するには地元の熱意が最も大切であり、時代を担っていく若い世代に受け継いでいくことが最も重要な課題でありました。

そこで「仲村渠真嘉戸」を守り伝えていこうと9名の青年が立ち上がり、島内の指導者や国指定組踊保持者の親泊久玄氏から指導を受け、村青年団協議会が 12年ぶりに公演を実施しました。

尚円王生誕600年祭プレイベントとして、平成27年11月23日に浦添市てだこホールで上演されました。

島の祭りイベント

伊是名村では、現在も数々の伝統行事が残っています。その多くは、農家が五穀豊穣を願うものであったり、海人たちの航海安全祈願や大漁祈願であったりしたのが始まりでした。時代の変化と共に風化していくことの多い伝統行事ですが、本村では、その多くがありのまま継承され、村民たちの生活の中に息づいています。

また、新たに始まったイベントは、島外からの観光客誘致にも大きな役割を果たしています。このように、一年を通して行われる新旧混じった多くの祭り・行事・イベントは、村民たちの故郷に対する愛情と誇りを育てることにも貢献しています。

ユッカヌヒー（海神祭）

恒例行事となっており、早朝から漁業組合各支部がそれぞれの拝所で酒をお供えして、海の恵みに感謝し、よりいっそうの大漁と航海安全を祈願する。伊是名ビーチでは、ハーリー競漕が行われる。

シヌグ

悪魔払いを軸に、村の繁栄と五穀豊穣、村人たちの健康を祈願する行事。

イルチャヨー

航海安全を祈願した祭祀で、現在では沖縄県内でも伊是名村と隣の伊平屋村でしか残っていない貴重な祭り。同日には、琉球最古の古謡と言われる、豊年祈願の「ティルクグチ」も行われる。

公事清明

毎年4月上旬に、伊是名玉御殿にて行われる清明。先祖の供養を目的とした清明のなかでも、伊是名では公事清明が島で最初に行われ、一般の清明はその日以降に行われるという、由緒正しき行事だ。

いぜな尚円王まつり

平成11年から始まった、尚円王への敬愛を込めて行われる催し物満載の祭り。昼の部では各字及び島内外からの参加者で行うスポーツ交流、体験プログラムなどのイベントを実施しており、夜の部メインイベントにおいても充実した内容で開催されている。

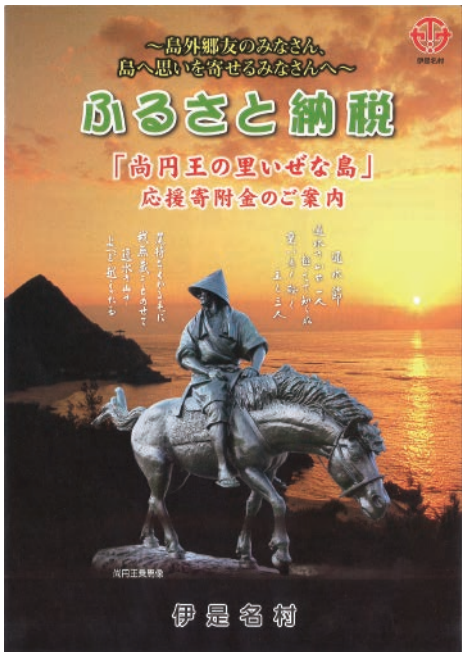
ウンナー

旧暦の6月15日、17日、25日に、内花を除く4字（伊是名・勢理客・諸見・仲田）で各字ごとに行われる豊年祭。毎年、祭りの約1週間前から綱引き用の綱づくりが始まり、当日の夕方から1本の大綱へ編み込んでいく。祭りは拝所や祝い事のあった家を練り歩くところから始まり、代表者の青年が広さ1～2畳の板の上で人を落としあうスナイ、誰もが参加できる綱引きで最高潮に盛り上がり、最後は相撲大会でしめくくる。

島の特産品

豊かな海、そして豊富な水に恵まれている伊是名島では、水産物や農産物を生かした特産品づくりが意欲的に行われています。特に、村の漁業を支える「もずく」は、その品質の高さから全国へ出荷されています。美容・健康に良い食材として注目されるこの「もずく」を使用し、「佃煮」「羊羹」など一風変わった商品の開発で新たな島の味を広めています。

さらに、離島でありながら肥沃な土地と湧水を利用した伊是名米「尚円の里」、モリンガやレモングラスなどの香草茶、銘酒泡盛「常盤」といった新旧様々な商品で、島を訪れた方々に「伊是名島の思い出」を楽しんでいただけるよう、広くピーアールしています。



尚円王の里いぜな島 応援寄附金

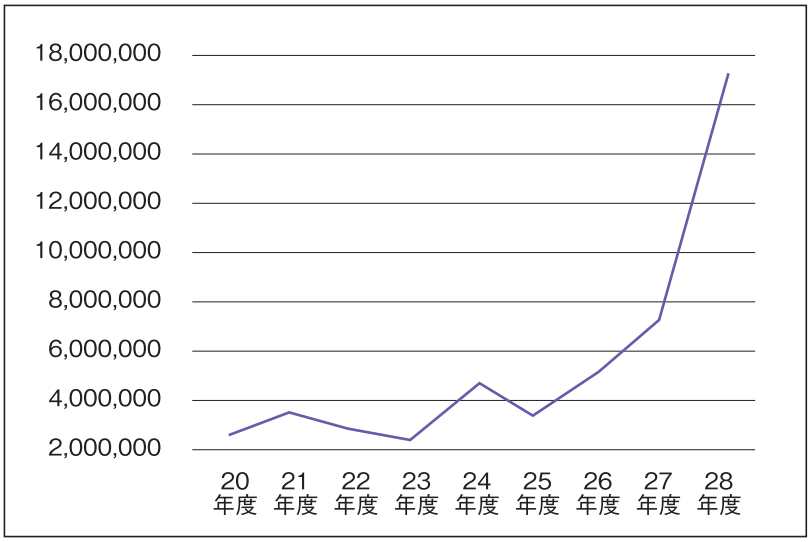
平成20年4月に施行された「ふるさと納税」制度。

平成28年6月よりインターネットでの申込みが可能となり、全国各地からこれまでの実績を大きく上回る勢いで申込みが寄せられています。

寄付者の皆様が寄せた寄附金は、「歴史と自然、人が共生するときわの島・いぜな」をめざして各事業、村発展のために使わせていただきます。

遠く離れた地よりふるさと伊是名島を応援してくださる郷友の皆様、伊是名島が好きで応援したいなど、熱い思いをよせてくださる多くの皆様のご支援に感謝申し上げ、今後も「伊是名村」に対し、温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年度寄付金
17,070,000円



年度	寄付金額	
20	625,000	実績
21	1,370,000	実績
22	965,000	実績
23	592,000	実績
24	3,238,000	実績
25	1,355,000	実績
26	3,463,000	実績
27	7,481,000	実績
28	17,070,000	見込み

島の観光案内

昔ながらの風景を色濃く残す自然豊かな伊是名島には、年間約3万人の観光客が訪れています。美しい海・歴史巡り・沖縄の原風景を楽しむ…など、目的は様々です。離島特有ののんびり風土の中で、村民との交流も楽しんでください。

伊是名集落を歩くだけで、時の流れが緩やかな島時間を感じることができます。道行く住民たちとの触れ合いも、旅に彩りを添えてくれます

伊是名集落散策

伊是名集落と勢理客集落には、サンゴの石垣、フクギの並木、そして伝統的な赤瓦の屋根など、沖縄ならではの風景が多く残っています。特に伊是名集落は、約400年前に集落を形成した当時の村並みのまま住民たちと共存し、訪れた人たちの目を楽しませています。

釣り

釣り人たちのなかでは、好釣り場として知られている伊是名島。島から船で数分の沖合でも、1メートルを超える魚が釣れることもあります。一年を通して様々な魚を釣ることができ、日本全国から釣り人が訪れています。

釣りに訪れる人の目的は、もちろん大物狙いだけではありません。初心者や子どもでも気軽に楽しむことができるので、親子連れにも人気です

ダイビング

ダイビングのシーズンは夏ですが、伊是名島の海が最も美しく透明なのは1月～4月頃です。無人島である「具志川島」と「屋那覇島」周辺は、静かに潜るには抜群の環境のため、潜りなれた玄人ダイバーが多いのも特徴です。

定住促進

伊是名らしい古民家修復・復元事業

伊是名村内の空き家となっている古民家を移住者向け住宅に修復・復元し、定住を促そうという取り組みが、平成25年度から始まりました。島の暮らしを守り、文化や伝統を受け継ぎ残していき、若い定住者を呼び込むことにより、島の活性化に繋げていきたいものです。古民家は、伊是名区と勢理客区に3棟で、そのうち築110年を超える「旧名城家」は国登録有形建造文化財に登録されました。

新たな施設

伊是名村体験・交流観光連携施設整備事業

伊是名城跡及び伊是名集落を対象として、観光施設の充実を図り、伊是名村の魅力を発信することを目的に「海浜体験交流施設」と「体験交流観光連携施設」を整備しました。

伊是名集落エリア（学校跡体験交流館・番所跡観光案内所）

赤瓦屋根、サンゴ石垣、フクギ並木といった本村を代表する原風景がのこる観光地として、気軽に利用できるトイレや観光案内のための休憩所、島の食材を使った料理の体験プログラム等を提供するための調理室を備えた施設を整備しました。

伊是名城跡周辺エリア（ターシの浜休憩所）

歴史文化資源の多い本村主要観光地であり、観光客及び地域住民の安全性確保と利便性向上のため、駐車場の整備や海浜利用促進を目的として、シャワーやトイレ施設を整備しました。

尚円王通水節公園～尚円王乗馬像建立

平成27年に尚円王生誕600年祭記念として、尚円王通水節公園を整備し、尚円王乗馬像を建立しました。像は、諸見に住んでいた20歳ごろの松金（尚円王）が、勢理客に住んでいた彼女のところから帰る姿を表したもので、公園内には恋心を歌った歌碑も建てられました。

島の交通

沖縄本島と伊是名島を結ぶ唯一の交通手段として、本島北部の今帰仁村運天港と伊是名村仲田港を結ぶフェリーが毎日二往復運航しております。

平成27年9月に就航した「フェリーいぜな尚円」は、フィンスタビライザー（横揺れ防止装置）を装備し、バリアフリーエレベーター、バリアフリートイレ、バリアフリー椅子席等の設備が完備されており、快適な船旅をお楽しみいただけます。

仲田港は定期空路のない伊是名島において、人、物流すべての玄関口となっています

海上タクシー

伊是名～伊平屋を繋ぐ、民間の業者により不定期に両島を結んでいます。

レンタカー

仲田港前に、島唯一のレンタカー会社がございます。軽自動車・原付バイク・自転車の貸し出しを行っております。

島へのアクセス

沖縄本島（運天港）から
伊是名島（仲田港）までの交通

フェリーいぜな尚円

仲田（伊是名）⇔運天 **55分**

運航表

港名	仲田（伊是名）	運　天		仲田（伊是名）
時刻	発	着	発	着
1便	9:00	9:55	10:30	11:25
2便	13:30	14:25	15:30	16:25

*出港10分前までに乗船して下さい。*車を航送される方は30分前までに所定の場所で待機していて下さい。
*自動車航送は通年予約制となります。

旅客運賃表（消費税込）

大　人（中学生以上）	片　路	1,810円
	往　復	3,440円
小　人（小学生）	片　路	910円
	往　復	1,730円
一般団体（15人以上）	片　路	1,630円
	往　復	3,260円
学生団体（15人以上）	片　路	1,270円
	往　復	2,540円
小人団体（15人以上）	片　路	820円
	往　復	1,640円
大人身障者	片　路	910円
	往　復	1,820円
小人身障者	片　路	460円
	往　復	920円

*往復券の復路利用は14日間有効です。
*運賃とは別に環境協力税（1人100円）が別途加算されます。

自動車航送運賃（運転手・消費税込）

車輌の長さ	片　路	往　復
3m未満	5,280円	10,040円
3m～4m未満	6,730円	12,790円
4m～5m未満	8,330円	15,830円
5m～6m未満	10,820円	20,560円
6m～7m未満	13,630円	25,900円
7m～8m未満	16,320円	31,010円
8m～9m未満	18,170円	34,530円
9m～10m未満	20,150円	38,290円
10m～11m未満	21,850円	41,520円
11m～12m未満	23,550円	44,750円
1m増す毎に	3,510円	6,670円

特殊手荷物（消費税込み）

自 転 車	700円
原　付	1,370円
自動二輪	2,210円

伊是名島観光についてのお問い合わせ

伊是名村役場
商工観光課
TEL（0980）45-2534
FAX（0980）45-2823
伊是名村商工会
TEL（0980）45-2475
FAX（0980）45-2306
いぜな島観光協会
TEL（0980）45-2435
FAX（0980）45-2360

船舶についてのお問い合わせ

仲田港ターミナル
TEL（0980）45-2002
FAX（0980）45-2823
運天港伊是名村船舶事務所
TEL（0980）56-5084
FAX（0980）56-5035

運天港までの交通

車をご利用の場合

- 那覇空港から今帰仁村運天港までタクシー・車で約2時間。
- 沖縄自動車道／那覇→名護（許田I.C）、運天港まで約1時間30分。
- 名護市内から運天港までタクシーで約30分

路線バスをご利用の場合

- 那覇空港→名護バスターミナル［路線No.⑳］
  （所要時間：2時間20分～2時間50分）
- 那覇空港→那覇バスターミナル［路線No.㉕、㊾］
  （所要時間：10分～15分）
- 那覇空港→旭橋（那覇バスターミナル）〔ユイレール〕（所要時間：10分）
- 那覇バスターミナル→名護バスターミナル［路線No.⑳］
  （所要時間：2時間～2時間30分）

高速バスをご利用の場合

- 那覇空港→名護バスターミナル［路線No.⑪］（所要時間：1時間45分）